霞台小だより
ひばり
Ｎｏ．681
令和５年５月31日 発行
青梅市立霞台小学校
校長 佐藤 広明

心の力

校長　佐藤広明

今から１０年ほど前、人工知能の研究者、ケンブリッジ大学のマイケル・Ａ・オズボーン氏が「今後１０～２０年程度で、アメリカの総雇用者の約４７％の仕事が自動化されるリスクが高い」と発表し、大きな話題になりました。

私の好きな回転寿司店の現在をイメージしてみます。
まず、家で来店予約をスマートフォンで済ませ店に到着。自動受付機で受け付けをして、指定されたシートに着席。タブレットを使って注文すると、頼んだにぎりが素早くレーンの上を走って合図とともに自分の前でストップ到着。美味しくいただいた後は、清算をタブレットで済ませ、会計は電子マネーでピッ。
回転寿司店での人の役割は限りなく少なくなりました。きっとバックヤードでも機械化が進み、経営の効率化が進められているはずです。家に帰ると、家を出る前にリモコンでスタートさせた掃除ロボットが、部屋の片隅で動けなくなりエラー信号を出しているのを救い出し、自分の家にセットしてあげてホッと一息、おなかいっぱいの大満足。しかし、なんだか人恋しさを感じるのです。

回転寿司に限らず、予測通り世の中は大きく変わってきています。
学校でも同様です。教員が手仕事でやっていた部分がＩＣＴの力により、効率化され、より効果的になっている部分がたくさんあります。今後、人工知能の力をうまく活用すれば、ひとりひとりの学習状況を適切に判断し、教師が教えるより効率的効果的に学習理解を深めさせることがきるはずです。
では、こんな状況を予測する中、これから学校は、教師はどんなことをやっていくことで、この先存在意義があるのでしょうか。

まずは機械や人工知能が対応できない、心の力を育てることです。相手の立場になって考える、優しさをもって接する、思いやりの気持ちを示す…、人間にしかできない心を育てることを、学校や教員は子どもたちへの教育活動を通して伝え育てていくことです。学校生活を通して、いろいろな人とコミュニケーションをとったり、たくさんの本を読んだり、主人公の想いを想像したり、自分の思いを言葉や文字に表現したり、協働して活動したりすることで、学校は大きな役割を果たしていくことができるはずです。
もうひとつは、考える力を育てることです。機械は考えることはできません。「どうすれば、あの子と仲良くできるかな」と考え行動し、さらに考え行動する。「どうやったらカンパニーで売れるデザインをうまくアピールできるかな」と考え創造し、考え行動する。機械にはできない考えることを通して、自分の力を自ら伸ばすことができることに寄与できる場が学校であるのです。
この先、心の力、考える力を育てることを学校がしっかりと担っていければ、学校も教師もこれから１０年、２０年後もしっかりと意味ある存在になれるのではと思うのです。